

平成二十四年五月一日発行（毎月十日）定価八百八十円

火星

平成二十四年五月号



七曜抄
(八)

山尾玉藻

春泥をひと跳びタカラジエンヌなり

コンパクトの光はなちし椿山

子規庵の電話鳴りゐる花の昼

鳩発つて鴉ののこる桜かな

花びらの散りこむ朝の鯉田かな

花の散る山墓に立つワンカッフ

山桜佛ごっそり盗まれし

無口なる少年を入れ春日傘

蝮の子が日傘の影をすすみけり

葉桜の夜は夜で痩せし空也かな

太白星

柳生千枝子

銀鈴の鳴り出す如く春の雪
臘梅や夜のポケットに鍵鳴らし
水仙の挿されそれぞれうつむける
踏青や猫の蹠を思ひをり
引鴨を仰ぎ己の影残る
指切りの約束春の夕焼雲
亡夫の画に見下ろされをり朝寝して

杉浦典子

鴨帰り水に窪みのありにけり
春の雪太筆に墨含ませせて

化粧筆にいろの残り垂り雪
海峡の春の灯ひとつつ点る
舟かへりきたる漁港の梅白し
春雨の沁みて色濃き埴輪たち
春の昼ちんちん電車で帰らふよ

浜口高子

襖褪せし部屋に通さる初音かな
狐火や鶉の瀬の闇にしぶくなり
凧の糸切れし風音あるばかり
道標の鑿あと深し月おぼろ
何の巢や雪解流れに張り出せる
青樟の雫が頬に鳥ぐもり
大鍋の湯気に紅梅枝垂れけり

火星作品

山尾玉藻選

笹鳴の日ざしにかわく母のもの

大和郡山城

孝子

二月礼者敷台に足袋履き替へし

山の日のつまづくところふきのたう

うす氷踏み来し牛の匂ひけり

芽起しの雨やみにけり卒業期

宝塚小林成子

寒明の地蔵の紐の昏みをり

金屏の丈のむかうの野梅かな

紅梅のけぶれるあたりより呼ばる

軸の間のかかりに置ける春コート

西陣の物干台のシクラメン

八幡坂口夫佐子

持ちきたる木槌曲尺春の寺

薄氷のひかり囁みたるシヨベルカ

水陰や巢づくりらしき音かすか

木道を鴉のあるく梅見かな
 紅梅に覚えある声とどきけり
 やらはれし鬼の臍うひうひし
 端溪の海青みたる獺祭
 紙鍋の紙に泡生る白魚かな
 白梅の荅四分の青さかな
 スターバックスにをんなばかりや鴨帰る
 母も吾も鶯餅に胸よごし
 餌台にひまはりの種余寒かな
 建国日青空なるを母に言ふ
 薄氷を片寄せてゐる柄杓かな
 貝がらを並べゐる子と春炬燵
 鏡台の中に雨降る雛の宿
 昏れのこる棚田千枚雛送り
 踏青やおもちやのやうに電車過ぐ
 上七軒うぐひす餅と染め抜いて
 喪の明けし三日ばかりを春の雪

八幡奥田順子
 箕面西村節子
 神戸深澤鱻

選のあとに

山尾 玉藻

やらはれし鬼の膺うひうひし

深澤 鱧

山の日のつまづくところふきのたう

城 孝子

早春の山辺の堤か畦道の景を思う。辺りの草々が未だ枯色の中、所々に頭をもたげた藪の藁が山の日差しを反しているのだろう。春浅い山辺の日差しはどこか弱弱しく、「つまづく」にはそのような山の日差しと作者の感応の啐啄のひびきがある。

紅梅のけづれるあたりより呼ばる

小林 成子

白梅は高貴な気品を漂わせ、紅梅は人恋しく親しさを漂わせる花である。その紅梅のあたりから自分の名を呼ばれるのはなかなか嬉しいことだろう。「けづれる」とあるので咲きみちる紅梅に隠れて、自分を呼ぶ人の顔は定かでないのだろう。それだけに一層こころ浮き立つ景である。

木道を鴉のあるく梅見かな

坂口夫佐子

一般に鴉は余り好かれる鳥ではなく、やたら嘴が大きく感じられる徒鴉は一層不気味である。しかし掲句、作者はそんな鴉にちよつところ惹かれてゐる。恐らく梅の花の美しさや辺りを漂う馥郁とした香に誘われ、思いがけず鴉に佳き偶感を抱いたのだろう。「梅見」の抽象と「鴉」の具象が意外な融合を見せる。

節分会の鬼役は鬼面をつけ降々とした筋肉が描かれている真つ赤な肉襦袢を着込む。ところで作者は肉襦袢の鬼にどこか優しさやほにかみを感じているようである。「うひうひし」に作者のこころの佳さがある。逞しい筋肉が描かれた鬼の膺が少し戸惑いながら逃げる様子が想像され、なかなか微笑ましい。

母も吾も鶯餅に胸よごし

西村 節子

お母さまと一緒に鶯餅を食べていて、作者はふとお母さまの胸元が黄粉で汚れているのに気付いた。それを払おうとして、「あんた胸が汚れるやないの」と逆にお母さまに注意されたのだろうか。こころの対話が聞こえるような長閑な一景である。

鏡台の中に雨降る雛の宿

奥田 順子

雛が飾られる都びた宿の一室を思った。部屋の隅にある鏡台に庭に降る雨が映り、その景にこころ満ちている作者である。本来、旅先で雨に降られると余り嬉しいものではないが、下五にゆつたりと据えた「雛の宿」の艶やかなゆかしさがそう思わせる。

髪切つて顔のおもたき椿かな

大東由美子

女性は髪を切ると自分の顔が人の目にどう映るかが気がかりなものである。ぼつてりと咲く「椿」の存在がこの女性特有の自意識に働きかけ、心情的な「おもたき」を引き出したのである。(以下略)

恒星圈

高松由利子

もらひ湯の声やさざんか垣越しに
淡嶋神社の波音に雛あつまり来
春浅き海へ向きたる放ち馬
朝ぼらけ咲くに間のある梅畑
梅東風や北のはづれの上七軒

大東由美子

戸栗末廣

梅さそふ明り障子に人の影
春の風めくれるものはみなめくり
白壁に春の影また消ゆるなり
もの種の乾きし音を耳元に
春の泥ぼたりと重き朱印帳

かげろふや兄の服着て兄の畑
兄の忌の桑の芽に色きてゐたり
恋の猫鳴き合ふことを省きけり
城址に石がごろごろ囀れる
白魚を吸ふくちびるのさびしけれ

高尾豊子

戸田春月

ひらかなの上手に読めて春の風
百年は生きてゐるてふ紅椿
黒マルチきらきら白菜縛られて
カンパニユラの名札立てられ春の土
頼まれし畑打ち延ばし延ばしなる

苗札が天神さんの笏のやう
勿体な満を持したる梅の花
梅が香や鎧がさねの祈願絵馬
梅宮の屋台に寒山捨得も
紙鍋のどれも煮えきし春灯

獅子座

山尾玉藻推薦

川端俊雄

花嫁を待つ雪吊りの雫かな
着膨れの痩せ腕なりし献血す
干されある浄衣凍てゐし昼の月
青年に自愛うながす冬の瀧

井上淳子

呼び水をポンプに注せりお中日
奴風一つ筑紫野夕づける
はらからと覗けば昔蟻の道
見えてくる南蛮寺や花菜坂

涼野海音

ウーパールーパーの掌春待てる
春鴨の胸に差しゐる朝日かな
革手帳匂へりバレンタインの日
雛市にすれ違ひたる人の息

西村節子

多宝塔の裾濡らしゐる植木市
さざなみの余呉湖に傾ぐ苗障子
爪立ちて鶏の羽搏くうすごほり
薄水のかけら持たせてやりにけり

田中文治

貝殻に雀のもやう水温む
こまやかな雨山門に紅梅に
寒明や陀羅助匂ふ小抽出
ひとつもとの紅梅なるや遠見にし

藤本千鶴子

消火器に馬喰町とあり梅花祭
草の餅ニツカポツカが一つ買ひ
菊炭の熾る待合長居せり
うぐひすや妙見宮のくづれ屋根

藤田素子

薄水や昨夜の言葉のひつかかり
春雨やこんぺいとうの色とりどり
春の昼車の上に乗積み
口内炎ひとつ持ちゆく梅見かな